

『帆・ランプ・鷗』語彙索引稿(一)

下 河 部 行 輝

はじめに

詩に関する索引というものについて眺めてみると、初行索引というものは、あっても、語彙索引というものがないのは、如何なる理由なのだろうというのが、わたくしの素朴な疑問である。萩原朔太郎の「私の詩の讀者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や」ことがら』ではなくして、内部の核心である感情そのものに感觸してもらひたいことである。」「月に吠える」序』に見られる如く、詩を分析することは一種のタブー、つまり詩編は全体として把握されるべきもので、個々の語に解体して、切り刻むことは禁忌であるというのが、その主たるものであるかもしれない。それは丁度、一枚の絵を見るのと同じで、どんな顔料を用いているか、どんな構図か、号は何号かということを精査しても、その絵の美しさ、雰囲気・意図というものが出てこないのと同じである。しかし、詩人は、自己の内奥に発

生した感情の炎、思想を訴つたるのは、言語そのものによる以外方法はないのである以上、又、もっともふさわしい「ことば」に、その思いを託して述べる以外に方法はない以上、詩人がどのような語彙を選択しているか、どのような語彙から、その詩が形成されているか、又、そこから、どのような新しい語を作り出しているかを考察することは、無意味とは思われない。少くとも創作活動とは、ある意味では、古いもの(それが語法であれ、感覚であれ)の打破であるのだから、広義の「形式の刷新」(語の用法、結構等)と言うべきであつて、極単に言えば、言語のための言語による革命でもある。そこに、一つ一つの語の用法の吟味というものが要求されるべきであり、語の全貌を示すべき語彙索引の必要性が出てくると思われるのである。言うまでもなく、特に今日の詩編は、それ自体がメタファであり、語の用法が、二重にも、三重にも比喩的に用いられている以上、單純に、散文との語彙の比較について形

式的に行なうべきではないことは明である。最終的には、詩篇の中に舞いもどって考えなければならず、又、それ以外にはないのであるが、情報量の大きさという現状からも、検索の便としての索引作りが必要である。そこから、詩と散文との影響関係、詩人間の影響関係、さらには、日本語全体の中における詩の役割等を考えるよすがとなるはずである。詩における語彙索引を敢て行うのも、そうした意図の上である。丸山薫が刊行した詩集は十六冊あるが、『つよい日本』は作者が棄てたものと考え、十五冊を対象に、順次その語彙索引を作成して行くつもりであるが、ここでは、その第一詩集の一部（紙片の都合上）を示して行く。本文は、各刊行されたものによるのがよいが、入手困難な事情を鑑み、角川書店刊の『丸山薫全集』に拠った。

凡例

- 一 底本は、角川書店発行の「丸山薫全集第一巻」による。
- 一 この索引は、「帆・ランプ・鷗」の用いられている語を、自立語の部と附属語の部とに分け、まず自立語より順次、五十音順によって検索出来るように作成したものである。
- 一 活用語は、終止形を見出し語とし、未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形の順に配列し、それぞれ、未・用・終・体・已・命の略号を用いた。

一 品詞は、名詞、代名詞、感動詞、副詞、連体詞、接続詞、動詞、形容詞、形容動詞、助動詞、助詞とし、さらに一語とした方がよいと思われる連語を単語として取扱った。擬声語（擬音語）擬態語（擬容語）は、副詞として取扱ってもよいと思われるが、敢て、特に別扱いした。

一 見出し語は、原則として単語としたが、合成語、接辞のついた語、複合語をも掲げ、特に、合成語、複合語は、それらを構成する単位でも引けるようにした。ただしその場合、訓によるものに限定した。

一 用例は、表記を重視して、本文のままとし、漢字表記の異なるもの、ひらがな表記のもの、カタカナ表記のもの、それらを全て列挙した。ただし、次のようなものは、用例を割愛した。

見出し語の次に、（ ）で示した意味と表記が本文でも同じ場合は、巻数と頁数のみ示した。

例 あか（垢）（名） 一 142

あな（穴）（名） 一 51

孔 一 14・52

右の場合、「あか」は、本文で「垢」しかなく、「あな」は「穴」「孔」が本文で用いられており、それぞれ一例と二例であることを示している。

用例で留意してほしいことは、合成語、複合語の場合、

それらを中心として掲げたので、それぞれの構成する単位の見出しに對する用例は、次のように示した。

例 あけ(明) (名) 夜明け ↓ 1-32

あめ(雨) (名) 1-34・36

風雨 ↓ 46・46・46・46・46・46・46

右の例は、「あけ」が単独で用いられず、「夜明け」の形のみで示しており、↓印は、夜明けを参照せよという意味である。「あめ」は、単独での「雨」は二例で、表記として参考とすべき「風雨」としての用法が八例で、風雨を参照せよという意味である。

一 記号は () が語の意味 () が文法的機能を意味する。

一 活用語のうち、とくに補助動詞を区別し、それぞれの用法を接続する用言毎に、又、活用毎に全て列挙した。

語彙索引を示すにあたって

従来の語彙索引では、語全体の概要を示しているものがほとんどない。語の用法、表記の異同、特殊な用法については記述があるが、品詞毎による総数を挙げていないものが多い。言語表現では、名詞(広く体言)と動詞(広くは用言)と付属語(日本語では、助詞、助動詞)が多いという見当がつくものではあるが、それらを示すことは、他の作品と比較する上で、意義のあるものと考えられる。

そこで、「帆・ランプ・鷗」における品詞別の数量を示すと次のようになる。

延	異	
694	368	名 詞
495	245	動 詞
63	39	形容詞
12	9	形・動詞
19	7	連体詞
55	41	副 詞
22	13	接続詞
5	3	感動詞
318	21	助動詞
954	31	助 詞

(擬声語・擬態語は、この表では副詞に含めた。複合語、合成語は二単語とした。)
 (異は異なり語・延は延べ語数を示す)

自立語は、異なり語数が七二五語、延べ語数が、一三六五語であるから、一つの単語は平均して二語弱ということである。同じ語が頻繁に用いられることはないことを示している。つまり、ほとんどが一回限りである。延べ語数が多いければ多いほど、同一の語の使用が多いという相関関係にあるわけで、右の事情は「帆・ランプ・鷗」の語の用法が、一回限りの語が多く、又、修飾語としての形容詞、副詞等が少ないことを物語る。こうした品詞別の一覧表が各索引に附与されることにより散文と韻文との相違、又、各個人における変容の状態の一端が窺えるものと思われる。最後に、異り語とその延べ数の一覧表を示す。

名詞

	裾	砂	隙間	姿	水面	水夫	巢	敵	正面	正太	蒸氣	瞬間	裝飾電燈 デコレーション	地面	自分	思念	下	仕事場	繁み	シグナル	屍
42	1	7	1	4	2	1	1	1	1	6	1	2	1	1	2	1	1	1	5	1	1
	烟草	戦ひ	竹杖	高さ	大木	退屈	體驅 た	それぞれ	それ	空	底	そこ	象遣ひ	掃射	象	戦友	戦争	船長	背中	せる(爲)	ステッキ
41	1	1	1	1	1	1	1	1	5	6	2	3	1	1	7	1	1	3	1	1	1
	天幕 テント	鉄格子	敵兵	敵彈	泥土	掌	手	鶴	爪	翼	索	月	ちぎれ葉	彈道	彈盆	彈丸	誰	ため(爲)	珠	弾	たび(度)
30	1	1	1	1	1	2	1	5	2	1	1	1	1	1	1	2	1	2	1	1	2
	斜	何(なんに)	夏	謎	情なさ	流れ	啼き聲	汀	中	内密	名	泥	どれ	鳥	爐	土砂	ところ	所	時計	時	燈火
48	1	8	1	1	1	2	1	1	15	1	1	2	1	2	1	1	2	3	1	1	1
	破片	羽根音	羽根	花びら	花	鼻	裸	はず(筈)	遊	場所	バカヤロウ	齒車	葉がくれ	葉	喉	念	布片	匂ひ	波間	泪	波路
35	1	2	5	2	2	3	1	2	1	1	1	1	1	2	2	2	1	1	1	2	1
	錨鎖	ひとり	隨	一つ	一聲	一風	人(たち)	柅	左	額	肱	脰	膝	鬚	光	陽かげ	陽	日	半分	反射	針
39	1	1	1	3	5	1	4	1	1	1	1	1	2	3	1	5	1	3	1	1	1
	砲架	方	帆	ベルト	軸	噴水	船腹	船乗	船	懐	蓋	服	笛	風雨	不意	ピルジ	麥酒	疲勞	艦	閃き	表情
43	2	1	4	1	2	1	1	1	2	1	2	1	3	9	3	1	3	1	1	1	2

名詞

	○豆電燈	○淡水	まま	眞晝	眼ばたき	燐寸	街	股	マスト	捲きタバコ	前	ま(間)	○襦袢	ほど	帆索	星	○僕	外	○砲身	○砲口	○方角
34	1	1	3	1	1	1	1	1	6	1	2	1	2	3	1	3	1	1	1	1	1
	眼	群	胸	鞭	○無造作	結び目	息子	○無數	むかう	みんな	耳	道	水	身じろぎ	右	見えかくれ	實	身	○満潮	まはり	壺
35	8	1	5	1	1	1	1	2	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1
	夜	夜更け	○様子	○容易	○用意	夜明け	夢	床	夕暮	開	山	屋根	家並	奴	○約束	物かけ	物	もの	燃殻	盲目 <small>めくら</small>	めいめい
50	8	1	1	1	1	2	8	1	4	6	5	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1
											私	わくら葉	ローマ字	○檜	レットテル	○瑠璃色	○兩弦	ランプ	○ラム酒	○喇叭	四十

累り語 368
延語 694
(ローマ字を含)

	寒い	淋しい	こまかい	濃い	黒い	暗い	口惜しい	哀しい	可愛らしい	重い	同じ	可笑しい	大きい	うるさい	羨しい	推い	忌々しい	暑い	赤い	青い	形容詞
28	1	1	1	1	1	5	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	4	
	弱い	蒸暑い	圓い	まばゆい	粉はしい	太い	廣い	ひどい	深い	速い	妙い	無い	乏しい	遠い	小さい	高い	涼しい	凄い	白い		
35	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11	1	4	1	3	2	1	1		

累延 39
延 63

動詞

	寝る	射る	(補)居る	居る	言う	急ぐ	(補)行く	(補)有る	有る	歩く	あらはれる	あと退る	命中る	焦慮る	褪る	明る	上る	仰向く	青さめる	○挨拶する
124	1	1	74	4	8	1	7	4	4	1	1	2	2	1	1	2	1	2	1	1

累 13
延 22

それから 2
また(又) 6
と 1
では 1
でも 1
でなくて 1
つまり 1
だが 4
それでも 1
そして 1
すると 1
しかし 1
が 1

接続詞

累 41
延 55

漸く 1

(助動)
(21) (31)
(318)(954)

合計	感	接	副	連	形動	形	動	名	累
725	3	13	41	7	9	39	245	368	
1365	5	22	55	19	12	63	495	694	延

累 3
延 5

やあ 1
もう(擬声) 2
ふむ 2
感動詞

(107 0 0 4 0 2 0 10 94 字音)
(148 0 0 3 0 2 0 10 134 延)

た	の	て	な	が	と	ば
り	で		が			
			ら			
1	1	164	5	4	14	5

や	で	よ	か	ら	と	へ	に	を	準	の	が		
		り	ら	(並)	(用)					(主)	(主)		
										連	体		
3	19	1	20	9	26	11	4	133	100	34	11	145	107

(きり)	と	な	ぞ	よ
	して			
1	1	4	2	1

し	か	な	さ	す	ば	も	だ	は			
か	で	ど	へ	ら	かり	(主)	け	(主)			
1	3	13	2	2	1	6	12	10	2	16	60

り	ち	ら	で	ま	で	べ	な	ず	ん	ぬ	や	さ	せ	れ	よ	う	や	だ	た		
ゃ	ゃ	あ	す	す		し	り	に			う	う	る	る	う	(惟)	(箇)	う	だ	い	
1	1	1	18	28	1	1	1	1	4	2	やう	さう	さ	る	う	う	やう	だ	い	だ	た
											1	9	1	9	1	13	13	26	26	30	127

(注)項目の上の
。印は字音によ
る語を示す。
又、字音を含む
複合語も示す。
ただし人名は除
く。

あ

あいさつする〔挨拶〕〔動〕

〔終〕挨拶する 一―14

あう〔合〕〔動〕

〔用〕重なり合って↓一―59

ぬめ合って↓一―33

撥ね合って↓一―42

あおい〔青〕〔形〕

〔用〕青く 一―16

〔体〕青い 一―15・21・22

あおぞめる〔青〕〔動〕

〔用〕青ざめて 一―20

あおむく〔仰〕〔動〕

〔用〕仰向いて 一―43・59

あか〔垢〕〔名〕 一―42

あかい〔赤〕〔形〕

〔体〕赤い 一―16

あがる〔上〕

〔用〕上って 一―51

立ち上って↓一―34

あかね〔茜〕〔名〕茜色↓一―59

あかねいろ〔茜色〕〔名〕 一―59

あきらか〔明〕〔形動〕

〔用〕明らかに 一―56

あくたろう〔悪太郎〕〔名〕 一―45

あけ〔明〕〔名〕夜明け↓一―32

あける〔明〕〔動〕

〔用〕明けて 一―22

明けりゃ一―21

あご〔顎〕〔名〕 一―52

あし〔脚〕〔名〕 一―40

脚もと↓一―54・56

あしもと〔脚もと〕〔名〕 一―54・56

あしか〔アシカ〕〔名〕 一―42・42・42

あせ〔汗〕〔名〕 一―52・54

あせる〔漉〕〔動〕

〔用〕漉せた 一―46

あせる〔焦慮〕

〔体〕焦慮る 一―40

あそこ〔彼所〕〔代名〕あそこ 一―58

あたる〔当〕〔動〕

〔末〕命中らない 一―56・56

あつい〔曇〕〔形〕

〔体〕曇い 一―54

蒸し曇い↓一―52

あてる〔当〕〔動〕

〔用〕押しあてた↓一―57

あと〔跡〕〔名〕迹 一―42

あとずさり〔後退〕〔名〕

あと退去り 一―51

あとずさる〔後退〕〔動〕

〔用〕あと退去って 一―51

あな〔穴〕〔名〕 一―51 孔 一―14・

52

あの〔彼の〕〔連体〕あ 一―45

あべこべ〔名〕 一―45

あほうどり〔信天翁〕〔名〕 一―21・21・

21・21・22・22

あめ〔雨〕〔名〕 一―34・36

風雨↓46・46・46・46・46・46・

46・46

あらし〔嵐〕〔名〕 一―52

あらわれる〔現〕〔動〕

〔終〕あらはれる 一―23

ありくい〔食蟻獸〕〔名〕ありくい

一―59

あるく〔歩〕〔動〕

〔用〕歩いて 一―50

ある(有)〔動〕

〔未〕あらう 一―30

〔用〕あった 一―56

ありません 一―54・56

〔用・補〕馬であった 一―44

〔終・補〕打つのである 一―40

笑ふのである 一―45

〔体・補〕山であるやうな 一―50

あるこゝる 〔名〕アルコール 一―42

あれ(彼) 〔代名〕 あれ 一―44

あわす(合) 〔動〕

〔用〕縫ひ合はしたのだから 一―23

あわせる(合) 〔動〕

〔用〕申し合はせたやうに 一―54

あわれ(哀) 〔形動〕

〔用〕哀れに 一―45

あんぜんべん(安全弁) 〔名〕 安全弁

一―42

あんばこ(暗箱) 〔名〕 一―52

い

いがい(意外) 〔名〕 一―47・52

いかり(鎚) 〔名〕 一―14・14・16・20・

20・20

いき(息) 〔名〕 一―32

いくつ(幾個) 〔名〕 いくつ 一―14・

52

いけ(池) 〔名〕 一―47

いく(行) 〔動〕

〔用〕行って 一―41

〔用・補〕囁いて行った 一―16

埋れて行った 一―28

動かして行った 一―42

落ちて行った 一―44

飄って行った 一―44

いし(石) 〔名〕 石ころ 一―59

いしころ(石塊) 〔名〕 石ころ 一―59

いそぐ(急) 〔動〕

〔用〕急いだ 一―57

いちよう(銀杏) 〔名〕 一―52

いちりん(一輪) 〔名〕 一―37

いちわ(一羽) 〔名〕 一―22・40

いつか(何時か) 〔副〕 いつか 一―50

いっしょ(一緒) 〔名〕 一―59

いっせい(一齋) 〔名〕 一―23・26・26

・26・27

いっばい(一杯) 〔名〕 一―30

いつも(何時も) 〔副〕 一―47

いはずま(稻妻) 〔名〕 一―46

いのち(命) 〔名〕 一―56

いびき(軒) 〔名〕 一―55

いう(云) 〔動〕

〔用〕云ひ 一―50

云って 一―58

〔体〕いふ 一―50・52・52・52・56

云ふ 一―58

いま(今) 〔名〕 いま 一―54・57

いまいましい(忌忌) 〔形〕

〔体〕忌々しい 一―55

いらい(以来) 〔名〕 一―43

いる(居) 〔動〕

〔未〕ゐない 一―22・42

〔体〕ゐる 一―58・58

〔用・補〕憶えてゐた 一―40

泳いでゐた 一―47

かくれてゐた 一―27

暮してゐた 一―29

来てゐた 一―41

(終・補)

巢をくつてゐた 一―29
 咲いてゐた 一―40
 遮つてゐた 一―46
 してゐた 一―28・28・28
 垂らしてゐた 一―47
 照らしてゐた 一―34
 泣いてゐた 一―45・45
 覗いてゐた 一―59
 ひそんでゐた 一―29
 塞いでゐた 一―46
 瞬いてゐた 一―52
 夢みてゐた 一―28
 云つてゐます 一―58
 捜してゐます 一―59
 掻き寄せてゐました 一―51
 傾けてゐました 一―59
 捜してゐました 一―54
 とまつてゐました 一―59
 見てゐました 一―52・52
 迂回してゐる 一―32
 唄つてゐる 一―16
 うろついてゐる 一―23
 考へてゐる 一―43

(体・補)

剪られてゐる 一―40
 囁いてゐる 一―20
 棲んでゐる 一―33
 立つてゐる 一―40
 灯してゐる 一―37
 鳴いてゐる 一―42
 肖てゐる 一―50
 伸び縮みしてゐる 一―23
 飲んでゐる 一―16
 まみれてゐる 一―47
 見張つてゐる 一―58
 持つてゐる 一―42
 ゆらいでゐる 一―16
 喜んでゐる 一―50
 押している櫓 一―38
 消えてゐる船類 一―18
 そよいでゐる仕事場 一―52
 啼いている鷗 一―17
 逃げでゐる帆索 一―18
 喋んでゐる鷗 一―34
 羽搏いてゐる鷗 一―17
 反射してゐる帆 一―19
 肥つてゐる蟹 一―50

瞬いてゐるせむ 一―17
 假睡んでゐる硝子戸 一―51
 見てゐるま 一―51
 囁めてゐる鷗 一―18
 明滅してゐる表情 一―47
 とまつてゐるのです 一―58
 輝いてゐるのです 一―58
 拵へてゐるのだな 一―54
 してゐるのだ 一―30
 寝てゐるぞ 一―50
 照らしてゐるばかりだ 一―18
 滲んでゐるばかりだった 一―41
 摺り落してゐるやうな 一―41
 泳いでゐるやうな 一―42
 瞞めてゐるうちに 一―59
 なくなつてゐることに 一―41
 濡れてゐるもの 一―46
 (その他) 吸つてゐらあ 一―50
 いる(射)(動)

(終) 射る 一―46
 いれずみ(入墨)(名) 一―16
 いろ(色)(名) 一―40・46
 藍色 一―59 瑠璃色 一―58

いわ(岩)〔名〕――42・57

う

うかがう(窺)〔動〕

〔終〕窺ふ――51

うかいする(迂回)〔動〕

〔用〕迂回して――32

うく(浮)〔動〕

〔未〕浮かぬ――58

うごかす(動)〔動〕

〔用〕動かして――42

うごく(動)〔動〕

〔未〕動かない――50

うし(牛)〔名〕――26・26・26・27・

27

うずたかい(堆)〔形〕

〔用〕堆く――29

うすやみ(薄暗)〔名〕――16

うすれる(薄)〔動〕

〔用〕薄れかかる↓――32

うすれかかる(薄)〔動〕

〔用〕薄れかかった――32

うた(唄)〔名〕――16

うたう(唄)〔動〕

〔用〕唄って――16

うち(内)〔名〕うち――59

うちけす(打消)〔動〕

〔体〕打ち消すやうに――26・26

うつ(打)〔動〕

〔未〕打たう――31

うつ(搏)〔動〕

〔体〕搏つ――44

うえ(上)〔名〕――17

うま(馬)〔名〕――23

うみ(海)〔名〕――17・17・21・21・

22・22・22・28・34

うめ(梅)〔名〕――40・40

うもれる(埋)〔動〕

〔用〕埋れて――28

うらばね(裏羽根)〔名〕――40

うらまち(裏町)〔名〕――33

うらやましい(羨)〔形〕

〔体〕羨しい――56

うるさい(煩)〔形〕

〔体〕うるさいな――50

うろつく(彷徨)〔動〕

〔用〕うろついて――23

え

えい(a) a――47・47

えいだっしゅ(a) a'――47

えぐる(抉)〔動〕

〔用〕抉り抜く↓――59

えぐりぬく(抉抜)〔動〕

〔用〕抉り抜いた――59

えだ(枝)〔名〕――26・26・26・27・

27・27・58・59

えんがい(掩蓋)〔名〕――56

お

お(尾)〔名〕――52

おいてけぼり〔名〕――56

おおきい(巨)〔形〕

〔幹〕巨きすぎる↓――54

おおきすぎる(巨過)〔動〕

〔用〕巨きすぎて――54

おおきい〔大〕〔形〕

〔終〕 大きい 一—47

おおきな〔巨〕〔連体〕 巨きな 一—50

おおきな〔大〕〔連体〕 大きな 一—51

おかあさん〔母〕〔名〕 お母さん 一—57

おかしい〔可笑〕〔形〕

〔終〕 可かしい 一—50

おきあがる〔起上〕〔動〕

〔用〕 起き上って 一—28

おく〔奥〕〔名〕 一—51

おく〔置〕〔動〕

〔用・補〕 置いておいたら 一—52

おさまりかねる〔納難〕〔動〕

〔用〕 をさまりかねた 一—54

おさまる〔納〕〔動〕

〔用〕 をさまりかねた 一—54

おしあてる〔押当〕〔動〕

〔用〕 押しあてた 一—57

おしたおす〔押倒〕〔動〕

〔用〕 押し倒しにかかる 一—45

おす〔押〕〔動〕

〔用〕 押して 一—32・38・46

押しあてる 一—57

押し倒す 一—45

おちば〔落葉〕〔名〕 一—51

おちる〔落〕〔動〕

〔用〕 落ちて 一—59

〔終〕 こぼれ落ちる 一—46

滑り落ちる 一—20

おと〔音〕〔名〕 一—23・38

羽根音 一—16・44

おどらす〔羅〕〔動〕

〔終〕 羅らす 一—42

おどろく〔驚〕〔動〕

〔用〕 驚いて 一—20

おなじ〔同〕〔形〕

〔体〕 同じ 一—58・58

おほえる〔憶〕〔動〕

〔用〕 憶えて 一—40

おまえ〔お前〕〔代〕 一—45・45

おもい〔重〕〔形〕

〔体〕 重い 一—38

おもい〔思〕〔名〕 一—20

思い出 一—32

おもいだす〔憶出〕〔動〕

〔体〕 憶ひ出す 一—51

おもいで〔思出〕〔名〕 思ひ出 一—32

おもいなし〔思徹〕〔名〕 思ひなし 一—

59・59

おもう〔憶〕〔動〕

〔用〕 憶ひ出す 一—51

おもう〔思〕〔動〕

〔未〕 思はれます 一—59

〔用〕 思ひながらも 一—41

〔体〕 思ふ物かげ 一—54

思ふやうには 一—56

およぐ〔泳〕〔動〕

〔用〕 泳いで 一—42・42

おり〔摺〕〔名〕 一—51

おりおり〔折折〕〔副〕 をりをり 一—50

おりる〔降〕〔動〕

〔用〕 おりて 一—23・58

〔終〕 おりる 一—58

おる〔居〕〔動〕

〔用〕 をりました 一—51

おれ〔俺〕〔代〕 おれ 一—54・54・54

おれ自身 一—54

おれじしん〔俺自身〕〔代〕 おれ自身

一—55

おろす〔降〕〔動〕

〔終〕 おろす 一―14・14

おんな〔女〕〔名〕 一―33・33・33・33

か

が〔接〕 一―56

かいめん〔海面〕〔名〕 一―18

かえす〔返〕〔動〕

〔用〕 引き返して↓ 一―58

〔終〕 見返すと↓ 一―47

かえる〔返〕〔動〕

〔用〕 撥ね返へって↓ 一―59

かえる〔歸〕〔動〕

〔未〕 歸らなくなる 一―14

〔終〕 歸らなかつたら 一―22

かえる〔變〕〔動〕

〔用〕 變へて 一―40

かえる〔替〕〔動〕

〔用〕 ひきかへて↓ 一―57

かえる〔換〕〔動〕

〔用〕 着換へて↓ 一―14

かお〔顔〕〔名〕 一―18・47・47・47・47・57・58

かがやく〔輝〕〔動〕

〔用〕 輝いて 一―58

かかろ〔懸〕〔動〕

〔用〕 薄れかかった↓ 一―32

〔終〕 かかる 一―45

かき〔牡蠣〕〔名〕 牡蠣殻↓ 一―14

かきがら〔牡蠣殻〕〔名〕 一―14

かぎり〔限〕〔接尾〕 一―56

かく〔畫〕〔動〕

〔用〕 畫いた 一―47

かく〔懸〕〔動〕

〔用〕 汗をかいた 一―52

かく〔掻〕〔動〕

〔用〕 掻いて 一―51

掻き寄せて↓ 一―51

掻き寄せながら↓ 一―51

かくす〔隠〕〔動〕

〔未〕 かくさう 一―31

かくたい〔楽隊〕〔名〕 一―23

かくれ〔隠〕〔名〕 見えかくれ↓ 一―40

葉がくれ↓ 一―58

かくれる〔隠〕〔動〕

〔用〕 かくれて 一―27

〔終〕 かくれる 一―27

かこう〔河口〕〔名〕 一―16

かけ〔彫〕〔名〕 一―54・59

かけ 一―47

陽かけ↓ 一―54・54・54・54

物かけ↓ 一―54

かけこむ〔驅込〕〔動〕

〔終〕 驅け込むと 一―23

かけたす〔驅出〕〔動〕

〔用〕 驅け出した 一―40

かけちがう〔掛違〕〔動〕

〔用〕 かけちがつて 一―29

かける〔驅〕〔動〕

〔用〕 驅け込む↓ 一―23

驅け出した↓ 一―40

かける〔掛〕〔動〕

〔用〕 かけちがつて↓ 一―29

話しかけて↓ 一―57

かさなる〔重〕〔動〕

〔用〕 重った 一―47

重なり合つて ↓ 19
 かきなりあう(重合)〔動〕
 〔用〕 重なり合つて 19
 かさねる(重)〔動〕
 〔用〕 重ねて 17
 かぜ(風)〔名〕 23・30・36・40
 風雨 ↓ 46・46・46・46・46
 46・46・46
 かつ(肩)〔名〕 17・17・40
 かつ(形)
 〔用〕 固くなって 156
 かつち(形)〔名〕 150
 窯形 ↓ 151
 かつこう(恰好)〔名〕 159
 がっくり(癡) ガックリして 157
 かつしゃ(滑車)〔名〕 16
 かつむける(傾)〔動〕
 〔用〕 傾けて 130・59
 かなしい(哀)〔形〕
 〔終〕 哀しい 16
 〔体〕 哀しい 120
 かなた(彼方)〔代〕 134
 かなでる(奏)〔動〕

〔用〕 奏で始める ↓ 155
 かなではじめる(奏始)〔動〕
 〔体〕 奏で始めるのでした 155
 かねる(難)〔動〕
 〔用〕 をさまりかねた ↓ 154
 かならず(必)〔副〕 かならず 150
 かま(窯)〔名〕 窯形 ↓ 151
 かまがた(窯形)〔名〕 151
 かもめ(鷗)〔名〕 17・18・20・20・20
 34
 かよう(斯様)〔副〕 やうに 153
 から(殻)〔名〕 燃殻 ↓ 17
 44
 からす(鴉)〔名〕 129・42
 がらす(硝子)〔名〕 硝子戸 ↓ 151
 がらすど(硝子戸)〔名〕 151
 からむ(絡)〔動〕
 〔未〕 絡まれた 129
 かわ(河)〔名〕 132・37
 かわいらしい(可愛)〔形〕
 〔用〕 可愛らしく 158
 かわる(變)〔動〕

〔用〕 變つた 159
 〔終〕 かはると 157
 かわる(替)〔動〕
 〔用〕 替つて 123
 かんがえる(考)〔動〕
 〔用〕 考へた 155
 考へて 143
 考へ沈む ↓ 154
 〔体〕 考へること 150
 かんがえしむ(考沈)〔動〕
 〔体〕 考へ沈むのでした 154
 かんがる(名) カンガル 155
 かんぶく(寬服)〔名〕 147
 かんぶくする(感服)〔動〕
 〔体〕 感服するのでした 154

き
 き(木)〔名〕 140
 き(樹)〔名〕 158
 き(氣)〔名〕 141・50・54・59
 きえる(消)〔動〕
 〔用〕 消えて 118

消えた 一—36

きかい〔機械〕〔名〕 一—52

きかんじゅう〔機関銃〕 一—56

きまき〔嬖嬖〕〔副〕 一—47

きがえる〔着換〕〔動〕

〔用〕 着換へて 一—14

きく〔訊〕〔動〕

〔終〕 訊くと 一—58

きこえる〔聴〕〔動〕

〔未〕 聴えず 一—59

きしる〔軋〕〔動〕

〔体〕 軋る 一—14

きた〔北〕〔名〕 北向き 一—51

きたむき〔北向〕〔名〕 北向き 一—51

きたい〔奇態〕〔形・動〕

〔体〕 奇態な 一—53

きやくま〔客間〕〔名〕 一—52

きよくげい〔曲藝〕〔名〕 一—23

きり〔接尾〕 見たきり 一—51

きり〔霧〕〔名〕 一—32・33

きる〔着〕〔動〕

〔用〕 着換へて 一—14

きる〔剪〕〔動〕

〔未〕 剪られる 一—35

剪られて 一—40

きれつ〔亀裂〕〔名〕 一—28

きれ〔片〕〔名〕 布片 一—36

く

くう〔食〕〔動〕

〔用〕 巢をくって 一—29

おいでけほりをくった 一—57

くうき〔空氣〕〔名〕 一—40・44

くぎ〔釘〕〔名〕 一—31

くずれ〔崩〕〔名〕 崩れ 一—29

くずれる〔崩〕〔動〕

〔終〕 笑ひ崩れる 一—26

くし〔櫛〕〔名〕 一—40

くしょうする〔苦笑〕〔動〕

〔体〕 苦笑する 一—50

くじら〔鯨〕〔名〕 一—52・52

くだける〔碎〕〔動〕

〔用〕 碎け散る 一—46

くだけちる〔碎散〕〔動〕

〔終〕 碎け散る 一—46

くち〔口〕〔名〕 一—58

口真似 一—58

くちびる〔唇〕〔名〕 一—47

くちまね〔口真似〕〔名〕 一—58

くび〔首〕〔名〕 一—17・59

くま〔熊〕〔名〕 一—36・40

くも〔雲〕〔名〕 一—51・51

くやしい〔措〕〔形〕

〔幹〕 口惜しきう 一—59

くらい〔暗〕〔形〕

〔体〕 暗い 一—17・17・21・22・34

くらす〔暮〕〔動〕

〔用〕 暮して 一—29

ぐるぐる〔廻〕 一—40

くる〔來〕〔動〕

〔用〕 きても 一—14

來て 一—17・41・45

來た 一—50・57

〔用・補〕 氣がしてきて 一—50

戻ってきた 一—57

おりて來ました 一—58

引き返して來ました 一—58

落ちて來ました 一—59

出て來た 一—52

〔終・補〕

寄ってくる 一—14

おりてくる 一—23

寄り添ってくる 一—32

湧き昇ってくる 一—42

〔体・補〕

こみ上げてくる 一—43

押してくる 一—46

くるま〔車〕〔名〕

齒車↓一—35

くれ〔暮〕〔名〕

夕暮↓一—15・47・59

夕暮れ↓一—47

くれる〔暮〕〔動〕

〔用〕暮れて 一—22

暮れりゃ 一—21

くろい〔黒〕〔形〕

〔用〕黒く 一—37

くろずむ〔黒〕〔動〕

〔用〕黒ずんだ 一—44

け

けす〔消〕〔動〕

〔未〕消された 一—17

吹き消さう↓一—17

けはい〔氣配〕〔名〕 一—41

けんきち〔健吉〕〔名〕 一—58・58・58

・59・59

げんけい〔原形〕〔名〕

ケンキチ 一—50

げんじつ〔現實〕〔名〕

一—45

こ

こう〔斯〕〔副〕かう 一—43・50・54

こうかい〔航海〕〔名〕航海ランプ↓

一—21・22

こうかいらんぶ〔航海ランプ〕〔名〕

こうし〔格子〕〔名〕鐵格子↓一—51

こうちよう〔候鳥〕〔名〕 一—28

こうもり〔蝙蝠〕〔名〕 一—29

こうや〔曠野〕〔名〕 一—52

こえ〔聲〕〔名〕 一—17・34・47・59

啼き聲↓一—20

こおり〔氷〕〔名〕 一—41

こい〔濃〕〔形〕

〔用〕濃く 一—15

こくこく〔刻刻〕刻々 一—56

こける〔痴〕〔動〕

〔終〕笑ひ痴ける↓一—26

ここ〔此〕〔代〕ここ 一—57

こごえる〔凍〕〔動〕

〔用〕凍えて 一—19

凍えた 一—42

こころ〔心〕〔名〕 一—14

こずえ〔梢〕〔名〕 一—58

こしらえる〔拵〕〔動〕

〔用〕拵へて 一—54

こちら〔此方〕〔代〕こちら 一—

こっそり〔副〕こっそりと 一—58

こと〔事〕〔名〕こと 一—41・50・55

ごと〔毎〕〔接尾〕ごとに 一—28

ことば〔言葉〕〔名〕 一—20

こども〔子供〕〔名〕 一—57

ことり〔小鳥〕〔名〕 一—58・58・59

59

この〔此〕〔連体〕この 一—54・57

こぼれる〔零〕〔動〕

- 〔用〕 こぼれ落ちる ↓ — 46
- こぼれおちる (零落) 〔動〕
- 〔終〕 こぼれ落ちる — 46
- こまかい (細) 〔形〕
- 〔終〕 こまかい — 23
- こみあげる (込上) 〔動〕
- 〔用〕 こみ上げて — 43
- こむ (込) 〔動〕
- 〔用〕 引っ込んで ↓ — 51
- もぐりこんで ↓ — 59
- 〔終〕 驅け込むと ↓ — 23
- 〔体〕 吹き込む ↓ — 46
- こや (小屋) 〔名〕 — 23
- こよい (今宵) 〔名〕 — 16
- これ (此) 〔代〕 これ — 54
- ころがる (轉) 〔動〕
- 〔体〕 ころがる — 56
- ころばす (轉) 〔動〕
- 〔体〕 轉ばすやうに — 56
- こんど (今度) 〔名〕 こんど — 58
- こなな (此) 〔連体〕 こなな — 54
- こんばい (困憊) 〔名〕 — 37

前号要目

- 『万葉集』卷十「鑑寸春吾山之於尔立霞雖立雖居君之随意」の訓み方
 - 二卷本「世俗字類抄」の所収語彙
 - 二卷本及び三卷本「色葉字類抄」との比較から——三宅 ちぐさ
 - 『異制庭訓往来』引用の連歌式目について
 - それは鎌倉時代後々末期の「花下新式」ではあるまいか——
 - 勢田 勝 郭
 - 越智 悦子
 - 吉田 俊彦
 - 福田 俊彦
 - 『万葉集』の「雨間」の表現上の効果
 - 吉田 俊彦
 - 福田 俊彦